

toVO トウモ
PLUS

www.tovo2011.com

SEASON 3



030



トウモプラス 第3シーズン 030



www.tovo2011.com



インタビュー

今号のご家族 ▶ 猿田 壮也さん・千帆さん・天音ちゃん

あまね

撮影場所 ▶ 陶工房 ゆきふらし (五所川原市金木町)

●2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶千帆さん「当時、天音は3歳で、体調を崩して保育園を休んでいました。病院へと連れて行く途中で地震に遭ったんですが、その時は風が強いのかなあって程度ですぐには気付かなかったんです。病院のあるショッピングセンターに着くと停電していて、そこで地震があったことを知りました。病院もやはり停電していて、診てもらおうことが出来なかったの、すぐに帰ってきましたね。」

▶壮也さん「僕はその頃、栃木に行ってたんですよ。その年の12月から10ヵ月間カンボジアで陶芸を教えることになっていたんですが、そこで使用する窯は薪を使う窯で、僕は灯油窯しか経験がなかったから、栃木の益子で薪窯を使って陶芸をやっている友人のところに経験させてもらいに行ってたんです。窯焼きは丸3日間掛けて行われるんですが、その最中2日目の、火の勢いを最高潮に上げていっている時に大きな揺れがきました。半地下だったことや、1300度という高温が窯全体を柔らかくしていたことなどのおかげで、その窯は震度6弱の揺れに耐えてくれました。もしも窯が崩れていたら、一山丸焼けだったかも…。その後本震並みの大きな余震が3回ほどありましたね。至る所で地割れがあり、(栃木で採掘される)大谷石で出来た塀や蔵は倒壊し、瓦屋根も全滅でした。ラジオを聞いたら被害は青森にまで及んでいるとのことでしたが、携帯電話はつながらず、通話がフリーになっていた公衆電話で青森と連絡をとれたのは翌12日の夕方のごとでした。」

▶千帆さん「地震の前から、うちにはむつからおばあちゃんが来てくれていたので心強かったですね。彼

(壮也さん)が帰ってくるまでいてくれたんで、助かりました。」

▶壮也さん「帰りは日本海側を北上して帰ってきました。福島や山形辺りでは道に段差ができていたり、通行止めがせいか警察の姿もたくさん見ましたね。13日の朝には青森に着いたんですが、雪がなくて良かったなあ。」

●心境や生活での変化はありましたか？

▶壮也さん「もともと電気をあまり使わない生活でしたが、よりアナログな生活をするようになりましたね。既存のライフラインに頼り切らない生活が良いと見直しました。カンボジアに行けたのも良かったかも。向こうには、一昔前の日本のような風景がありました。ガスはなく、水は井戸水、電気はあっても料金が高い上によく停電してましたが、現地の人たちは平気なんですね。カンボジアでの生活には、天音が一番適応してましたよ。」

▶千帆さん「震災当時、天音が津波の映像を怖がることもあり、あまりテレビを見ないようになったんです。完全にデジ化から3ヵ月後にカンボジアへ行ったのですが、それ以降はテレビのない生活をしていますね。」

●10年後のイメージは？

▶壮也さん「10年後も変わらない生活をしていると思います。やりたいと思ったことをやれる場所を探して、ここ金木町に来れたので。ここは物凄く住みやすいところですよ。」

▶千帆さん「私はもっと養蜂に力を入れていきたいいな。」

終

定期購読のご協力をお願いします

1年間の定期購読を承ります。1,500円(送料・寄付金)／1年間(12号)です。ご希望の方は、「郵便番号・ご住所・お名前」を明記の上、メール (info@tovo2011.com) にてお申し込みください。

編集後記

今回お話を聞かせて下さったのは、共に陶芸家の猿田御夫妻。自宅兼工房の「陶工房ゆきふらし」(※10月4日(土)～5日(日)に板橋町にて開催される「クラフト小径」にも出展が決まっております!)での取材となりました。インタビュー終盤の頃に帰ってきた天音ちゃんは、とにかく元気な女の子で「10年後、天音ちゃんはどうしてるかなあ?」と聞いてみると、物干台兼プランコ兼鉄棒にて、笑って逆上がりで応えてくれました。助走付きで…。【なるみしう】

東日本大地震・津波被災者チャリティー

tovo トヴォ

2011年6月～2014年8月30日まで

¥2,579,505

を寄付することができました。ご協力に感謝いたします。

【tovo/トヴォ】は、2011年3月11日の東日本大震災によって、親を失った子どもたちを、青森から支援するプロジェクトです。チャリティーグッズを制作・販売し、その経費を除いた全ての収益を、長期的な子どもたちの心のケアの為、あしなが育英会へ継続的に寄付し、青森から「あなたがたのそばにいつもいますよ」と伝え続けます。ご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。



今号のご家族▶猿田 壮也さん・千帆さん・天音ちゃん

撮影場所▶陶工房 ゆきふらし (五所川原市金木町)

【インタビュー】

●2011年3月11日のこと、憶えていますか？

▶千帆さん「当時、天音は3歳で、体調を崩して保育園を休んでいました。病院へと連れて行く途中で地震に遭ったんですが、その時は風が強いのかなあって程度ですぐには気付かなかったんです。病院のあるショッピングセンターに着くと停電していて、そこで地震があったことを知りました。病院もやはり停電していて、診てもらうことが出来なかったので、すぐに帰ってきましたね。」

▶壮也さん「僕はその頃、栃木に行ってたんですよ。その年の12月から10ヵ月間カンボジアで陶芸を教えることになっていたんですが、そこで使用する窯は薪を使う窯で、僕は灯油窯しか経験がなかったから、栃木の益子で薪窯を使って陶芸をやっている友人のところに経験させてもらいに行ってたんです。窯焼きは丸3日間掛けて行われるんですが、その最中2日目の、火の勢いを最高潮に上げていっている時に大きな揺れがきました。半地下だったことや、1300度という高温が窯全体を柔らかくしていたことなどのおかげで、その窯は震度6弱の揺れに耐えてくれました。もしも窯が崩れていたら、一山丸焼けだったかも…。その後も本震並みの大きな余震が3回ほどありましたね。至る所で地割れがあり、（栃木で採掘される）大谷石で出来た塀や蔵は倒壊し、瓦屋根も全滅でした。ラジオを聞いたら被害は青森にまで及んでいるとのことでしたが、携帯電話はつながらず、通話がフリーになっていた公衆電話で青森と連絡をとれたのは翌12日の夕方のことでした。」

▶千帆さん「地震の前から、うちにはむつからおばあちゃんが来てくれていたので心強かったですね。彼（壮也さん）が帰ってくるまでいてくれたんで、助かりました。」

▶壮也さん「帰りは日本海側を北上して帰ってきました。福島や山形辺りでは道に段差ができていたり、通行止めのせいか警察の姿もたくさん見ましたね。13日の朝には青森に着いたんですが、雪がなくて良かったなあ。」

●心境や生活での変化はありましたか？

▶壮也さん「もともと電気をあまり使わない生活でしたが、よりアナログな生活をするようになりましたね。既存のライフラインに頼り切らない生活が良いと見直しました。カンボジアに行けたのも良かったかも。向こうには、一昔前の日本のような風景がありました。ガスはなく、水は井戸水、電気はあっても料金が高い上によく停電してましたが、現地の人たちは平気なんですね。カンボジアでの生活には、天音が一番適応してましたよ。」

▶千帆さん「震災当時、天音が津波の映像を怖がることもあり、あまりテレビを見ないようになって

たんです。完全地デジ化から3ヵ月後にカンボジアへ行ったのですが、それ以降はテレビのない生活をしていますね。」

●10年後のイメージは？

▶壮也さん「10年後も変わらない生活をしていると思います。やりたいと思ったことをやれる場所を探して、ここ金木町に来れたので。ここは物凄く住みやすいところです。」

▶千帆さん「私はもっと養蜂に力を入れていけたらいいな。」

【編集後記】

今回お話を聞かせて下さったのは、共に陶芸家の猿田御夫妻。自宅兼工房の『陶工房ゆきふらし』（※10月4日（土）～5（日）に板柳町にて開催される『クラフト小径』にも出展が決まっております！）での取材となりました。インタビュー終盤の頃に帰ってきた天音ちゃんは、とにかく元気な女の子で「10年後、天音ちゃんはどうしてるかなあ？」と聞いてみると、物干台兼ブランコ兼鉄棒にて、笑って逆上がりで応えてくれました。助走付きで…。【なるみしう】

【寄付総額】

2011年6月～2014年8月25日まで、「¥2,579,505」を寄付することができました。ご協力に感謝いたします。